

# JAELE Newsletter

## 上越英語教育学会通信

*The Joetsu Association of English Language Education*

July 14, 2015

No. 15

### 大事なことはすべて上越で鍛えていただいたこと

千葉商科大学教授  
酒井志延（平成元年度修了生）

上越教育大学に、2年間派遣されただけでも、自分は幸運だと思っていた。このたび、1年間、外国で研究ができることになった。上越教育大学で鍛えていただいたおかげだと感謝している。

研究テーマは、異文化理解の研究とヨーロッパの言語教育。引き受け機関としては、ウィーン大学にお願いすることにした。日本からは、英語教育研究では、アメリカや英国に行つて研究する人が多い。だから「えっ、ウィーン大学ですか」と聞かれることが多い。理由は3つ。

1つ目の理由だが、ウィーン大学で、英語教育専攻の博士課程に60分ほど「日本の英語教育」について講義した時に、なぜここに来たかの理由を以下のように述べた。

As for the languages themselves, English and German are similar. However, the situation of the English education in Austria is similar to that in Japan, in that students have little chance to speak and use English outside classrooms, compared to that in the United States, where English is used for ESL to immigrants. Therefore, English education in Austria may be greatly helpful to Japanese English education.

2つ目の理由だが、オーストリアでは Content Language Integrated Learning (CLIL) での授業が盛んだからだ。日本では教科横断型学習といわれている。ぼくは、小学校英語教育には部分的な CLIL を取り入れるのがいいのではないかと考えている。北條先生も「他教科の内容を外国語活動に活かすことは、高学年児童にとって、既知の知識や能力を再び生かす機会」と述べていらっしゃる。この CLIL に関して、すでにウィーンやイタリアでいくつかの学校を見学させていただいた。よく CLIL とイマージョンの違いを聞かれるが、CLIL は、たしかにイマージョンと同じように受け止められている。これに対して、上智大学の池田真先生は「イマージョンは、あれは英語で授業をするだけです。CLIL は、考える力を養成します」とおっしゃっていた。つまり、CLIL の 4C, Content, Cognition, Communication, Culture を扱う。これが CLIL の大きな要素である。だから、この 4C に注目していれば、母語を使っても CLIL での指導はできる。実際、オーストリアの学校でもイタリアの学校でもいくつか CLIL の授業を見たが、必要に応じて母語を使っている。

これは、イマージョンではあり得ないことである。このCLILについての調査結果は、まだ、本稿では公開できない。次回にでも、紙幅をいただけるなら、公開を検討してもよい。

3つ目の理由は、ウィーンはヨーロッパのほぼ真ん中にあり、いろいろなところにアクセスが容易である点だ。先日もミラノまで行ったが、飛行機で1時間半ほどで着いた。機会が与えられればヨーロッパのいろいろな国での外国語教育を見学したいと考えている。

ウィーンに住んだり、イタリアの都市を旅してまわってわかったことだが、思った以上に英語が通じない。オーストリアに来る前は、何回かオーストリアの小学校の英語教育なども見学していたから、もう少し英語が通じると思っていた。しかし、ウィーン大学の英語教育の先生と話すと、やはりだいぶ問題があることがわかった。オーストリアも日本と全く同じ問題を抱えていると言える。確かにウィーンでは、英語だけの会話は観光客以外ほとんど聞かない。英語が外国語である環境だ。観光業者を除くと、社会的な地位が高そうな人と英語で話せる。しかし、それ以外の人にはあまり英語が通じない。英語で話しかけると「英語はできない」とよく答えられる。電車の中で、観光客が地図をもって“English? English?”と聞きまわっていたりする。今度、アパートを借りた時もそうだった。もっと簡単に借りられると思っていたが難航した。単身で1年間そして家具付き、しかも大学の学期の途中という時期の悪さ。それに加えて、英語でコミュニケーションができる不動産屋が見つからなかった。ドイツ語の物件リストを、辞書を使って丹念に当たる気力はなかった。だから少し高いと思ったが、英語で交渉できた会社と契約した。ドイツ語ができたならもっと安く借りられただろう。約束の日の10時半に引っ越しでその場所に行き、カギを渡してくれるというので、入り口で待っていたら、全く英語ができない人が現れた。日本はカタカナ語があるからもう少し通じるだろうと思うほど英語はできなかつた。本当にどういふ英語教育をしているのだろうと思った。でも、僕の怪しいドイツ語と電子辞書と、あとは本当に通じたかなど不安に思いながらも身振り手振りでなんとかこなつたようだった。その経験で、思うことがあつた。そこで、使つたドイツ語の単語は覚えている。やはり言語は使うことが重要なのだろう。だから、同じゲルマン系の言語という理由だけで、ドイツ語話者は英語を簡単に習得できると思うのは間違つている。使わせないとだめだ。

やはり、暮らしていると、ドイツ語が使えると便利だということがわかる。自分もドイツ語講座に通うことにした。日本では、「英語を英語で」がかまびすしい。自分は「英語を英語で」習う授業を受けたことがない。だから、「英語を英語で」学ぶ側の気持ちがわかりにくい。では、独語で独語を学ぶ授業を受けてみて、どんな気持ちになるか体験しようと考えた。さっそく、CEFRでA1レベルのクラスに申し込んだ。すでに授業は始まり、5回分は終わつていたが、「いまでしよう」と思い申し込んだ。A1クラスは最低レベルでだが、12週間で、基礎から、英語だと英検3級レベルを目指す。先生は母語話者の女性。クラスのメンバーは、ロシア、ポーランド、ナイジェリア、チリ、グルジア、イタリア、キューバ、スペイン、台湾、日本など。共通語はブローケン・イングリッシュ。年齢は自分が一番高いと思うが、自分以外にも結構高そうな人から、若者まで15名が学ぶ。授業の進め方は、先生が生徒に質問し、生徒が答える方式で進む。先生からの質問は、教科書にある問題（文法問題、対話完成、リスニングでの質問）の答えだ。ペアワークはあまりやらない。授業は2回しか受けていないが、クラスの中で単語は自分が一番知つているだろうが、聴き取りは自分が一番ダメだ。はっきりしている。リスニングができない。一回目の授業では、半分以上聞き取れなかつた。それで、2回目の授業の前に、かなり予習を綿密にやっ

ていって、75%くらいは聞き取れるようになった。教科書にあることを話したり質問されたりすると何とかなるが、教科書から離れる（予習していない）と、俄然ハードルが高くなる。クラスメートの多くはついていっている。12週間で英検3級を目指すのだから、受講生のほとんどは熱心だ（僕も含めて）。僕が得意な読解は、教科書にのっけはいるが、それは飛ばす。あくまでも、口頭でのコミュニケーション能力の養成が目標である。

この授業方式は教室外が独語環境にある独語教室のものだということがわかる。少人数、その言語を使う意欲のある学習者、そして、その言語を流暢に操る教師。この3条件がそろっている。日本の教室には無いものが多い。政府も「英語を英語で」というなら、せめて15名程度の小人数クラスにする政治的な決断をしてほしい。

最初の写真は、ウィーン着いた時に、見つけたイースターのマーケット風景。

2枚目は、イタリアの小学校。アフリカでカカオが摘み取られ、ヨーロッパに運ばれチョコレートになり売られていく過程を10段階であらわす授業で、生徒たちは各課程を演じる。写真は、カカオ豆がトラックで波止場まで運ばれる過程を演じている様子。壁にはその過程がA3サイズ10枚のポスターに英文の説明と絵や写真で図示されている。

3番目の写真は、ウィーンから電車で1時間半のところにあるスロヴァキアの首都ブラチスラバで見つけたかわいい青い教会。





## 自分を変える2年間

大学院1年 言語系コース(英語)

橘 直人

大学時代は、小学校教育を専攻していました。先輩から「授業を余分に取れば、副免許で中高の免許を取れるよ」と言われ、中学高校時代に得意としていた英語の免許をとることにしました。しかし、英語の勉強にはそれほど力を入れず、「自分は小学校教師になるんだ。」ということを考えて日々を過ごしていました。

運良く現役で群馬県の教員採用試験に合格することができ、念願の小学校教員になることができました。上手くいかないこともありましたが、かわいい子どもたちと共に過ごす学校生活は非常に充実していました。

小学校教員として3年を過ごしたときに、中学校へ異動することを命じられました。免許は持っているけれど、まさか自分が中学校教員になるとは思っていなかったもので、本当に戸惑いました。初めて赴任した中学校は、いわゆる「荒れた中学校」でした。騒がしい新任式、始業式の様子を見て不安にはなりましたが、「この学校を建て直すんだ、やってやる！」という意気込みだけはありました。

小学校の時の学級経営の経験もあり、クラスはなんとかかなると思いましたが、不安なのは「授業」でした。中学校教員1年目。TTで組んでいる同じ英語科の先生は、スムーズな授業を行っており、生徒も楽しそうに授業を受けていました。単元毎にT1とT2を変えるという方針になっており、私の授業になると生徒は困惑しました。「授業が下手で、分かりにくい」と生徒から手紙もらったこともありました。悔しく思うと同時に、生徒に対して申し訳ない気持ちが募りました。

「何とかしたい」という思いから、本を貪るように読みました。中学校英語のセミナーがあると聞けば、東京や長野まで出かけることもありました。研究授業にはいつも立候補し、様々な人から色々な意見をもらいました。教員仲間とともにサークルを作り、模擬授業や実践報告を繰り返しました。

そんなことを何年かしているうちに、生徒からは「授業が楽しい」「英語は、50分があつという間に過ぎる」「分かりやすい」「テストで点が取れるようになった」と言われるようになりました。

ただ、気になっていたことが2つありました。1つ目は、授業はスムーズに行えるようになったけれど、私自身の英語力が高くないこと。授業前の打ち合わせ、授業中などALTとの会話に詰まってしまうたり、内容が理解できなかつたりすることがありました。2つ目は、私の授業を通じて生徒が「ALTと、英語でコミュニケーションをとるレベルに達していない」こと。いわゆる受験英語だけでなく、「使える英語」を、授業を通じて身につけさせることができていると感じていました。2つの課題を解決しなくては、と思っていましたが、日々の忙しさにかまけて自分自身の英語力を上げる努力をせず、今まで通りの生活と、今まで通りの授業を行っていました。

中学1年生から3年間持ち上げた生徒を卒業させる年。気が付けば、中学校教師として7年が経過していました。「持ち上げの生徒も卒業だし、そろそろ異動かな」と思っていた時に、勤務校の校長先生から「大学院に行ってみないか」と声をかけられました。自分自身の英語力を上げ、授業についてじっくり学び直すチャンスだと思い、家族を置いて単身赴任することを決意しまし

た。勤務校の送迎会で、「2年後、レベルアップして戻ってきます！」と宣言して群馬を発ちました。

大学院では、毎日が新鮮です。毎回の授業では知らないことばかり。英語の論文を読み、レベルの高い仲間と英語でコミュニケーションをとることで、自分の力量不足を感じつつ、勉強する意欲をもらいます。時間もたくさんあるので、本をたくさん読み、自分自身の英語力を上げるための勉強に取り組むこともできます。2年後、レベルアップした自分が今までとは違った授業を生徒に行っている姿を想像しながら、今日も大学院へと足を運んでいます。

## 立ち止まってみて

大学院 1年 言語系コース(英語)

新井美奈

大学院に入学をして、授業にも慣れ、友達もでき、学校生活はとても充実しています。ですが周りのみんなが教師を目指す中でふと、自分はなぜ教師を目指すのか改めて考えたり、大学院での目標を考えたりしていました。そんな何かモヤモヤしている時にこの原稿の依頼が来ました。

私が教師を目指すきっかけになったのは、高校の部活動です。中学ではバスケ部に入部し、最初はなかなか試合に出させてもらえませんでした。引退する頃には、副部長としてレギュラーになることができました。勉強も大好きでした。部活も勉強も努力した分だけ結果になって自分に返ってくることに喜びを感じていました。その甲斐あって、高校も自分の志望する高校に合格することができました。もちろんバスケ部に入部しました。しかし、入部してすぐに3年生の先輩が引退してから、経験者の自分と初心者の2人しか部員が残らず、私はそこから3年間部長を務めることになりました。試合には出場できず、体育館も使わせてもらえない環境で私は必死で、練習メニューを考えて、部員のために行動をしました。その翌年に新入部員が入部し、試合に出場できる人数へと変わりましたが、結果として私と同じ学年の部員2人は最初の1年で辞めてしまい、そこからの引退までは私の学年は自分1人と後輩というチームでした。心から上手くなってほしいという気持ちで同じ学年の2人に指導をしていましたが、どこかですれ違ってしまっていたのだと、後から気づくことができました。私の中で何もかもが変わりました。当たり前だと思っていたバスケができる環境、人の気持ちを本当に考えるとはどういうことだったのか。誰かが教えてくれたわけではないのに、いつの間にか学校生活、部活動を通して今の自分の基盤となるものを学校で学び、成長していました。そんな楽しいことも悔しいことも悲しいこともたくさんある学校で、自分のように生徒が困難にぶつかった時、共に悩み、手助けをしたいと思ったのが今日も教師を目指す続ける理由です。

大学でもその信念のもと、教育学部ではなかったものの、中高の英語の免許を取得できました。英語の教員になることを決めたのは、ただ純粋に英語が好きだったからです。中学で初めて英語に触れ、他の国の人と話せるなんて魔法みたいだなあ〜かっこいいな〜というところから始まり、高校では英語のテストでクラス最低点を取っても、それでも英語に初めて触れた時の楽しさを忘れられずに、大学は英語学科に進学しました。大学4年生になり、教育実習も無事に終わり、い

ぞ教員採用試験を見据えた時に、今の自分が教壇に立ち、教える姿を想像することができませんでしたし、そんな自信もありませんでした。中途半端な知識で、免許を持っていて、教師を目指している自分が本当に嫌でした。そんな時に母が、「〇〇さん、上越教育大学院卒業して今年先生になったんだって〜。」と、ふと私に話したことがきっかけでした。焦らないで、大学院で2年間英語教育について学び、現場に出るといのは自分にとって新たな選択肢でした。そして、今、大学院に進学したことを心から良かったと思っています。学びたかったことを学び、同じ夢をもつ人々と学び合い、地元である上越で日々過ごせることを本当に幸せに思います。正直、上越教育大学院では現職の方々、様々な職歴をもつ方々がいる中で、みんなが自分自身の教師像を持ち、努力する中で圧倒されてしまい、自分と比べてしまうこともあります。ですがこの原稿を書くに当たり、初心を思い出すことができました。そして、入学前は自分に自信をつけるために大学院で学ぼうと思っていました。今もたしかにそう思います。ですが、最近は何か違うのではないかと感じます。自分が教師を目指す信念を持ち続け、学び続けることが第一義であり、そこに自信があるないに関わらず、自信を持たなければならないと思うようになりました。また、教師になった時にどう生徒と向き合いたいか、何を伝えたいのかという意志こそが大切なものだと思ってきました。これからの大学院生活で自分の目指す教師像になるべく、日々邁進していきたいと思っています。

## 大学院派遣事業への感謝

大学院2年 言語系コース（英語）

梅津 英佑

新潟県での教員生活を11年務め、希望がかなって上越教育大学大学院へ派遣された。きっかけは2つある。

一つ目は2年前の教科研修である。約半年間、仮説を立て、授業実践をし、生徒からデータを集め、結果を考察した。実際に取り組んでみたらあつという間だったが、私にとって長い期間であった半年間の授業実践、授業研究は新鮮で、また多くのことを考えることができた。「今回の実践のどこが改善点で、どこが上手くいったところなのか。」といったことを考えた時、理論的な根拠がないことに気が付いた。改善点もうまくいったところもすべて自分自身の経験に基づく推論の結果であり、一般化できないのである。私たち英語科教員が日々授業をし、研究授業、公開授業を行い、発表するのは、最終的には当然生徒の英語力向上のためであり、一般化できる実践の構築こそが大きな目標である。そのためには理論的根拠が必要不可欠である。このような思いに強くかられ、大学院で勉強し直したくなった。

もう一つの理由は、自分自身の英語力の向上である。中学校で英語を指導していると、どうしても自身の英語力が中学校レベルになってしまう。英語検定の指導をしていると、まれに準2級、2級を受験したいという生徒が出てきて、分からない単語に出くわすことがあった。指導する立場にいる人間が、これではいけないと強く思うようになった。

上記のような理由で大学院生活をスタートさせたが、1年目はなかなか自分の時間を持つことができなかつた。予想以上に授業が大変だったからである。自分の英語力が低下していたことも

あり、予習も振り返りも本当に苦勞した。「あの課題を終わらせなければ」「レポートを仕上げなければ」といった義務感で時間が過ぎていった。しかし時の経過に伴い、予習や復習にかかる時間は変わらないが、負担感は軽くなっていった。授業を受け、課題をこなす中で、これまで自分自身が生徒に対して指導していたことが、どのような理論に基づいたものだったのかということに気づくことができ、また同時に自分の実践が理論を伴わない内容の薄いものであったと反省することができた。自分自身の意識も、「やらなければ」という義務感から、「もっと知りたい」という好奇心、探究心の方が強くなっていった。大学院に来た二つ目の理由でもある「英語力」は、授業や課題をこなす以外にも資格・検定試験に向けて地道に自主学習を進めている。

大学院に来ていくつかが大事なことに気が付いた。1つは教わる立場の気持ちである。課題の出され方ひとつでやる気が変わること、説明の仕方ひとつで集中力が変わることなどである。あらためて、授業を構成するという作業が、非常に大切でありいくら時間をかけすぎてもかけすぎにはならない部分であることに気づかされた。もう1つは、教わる立場の人間だけではなく、教える立場にいる人間も、学び続けなければならないということである。上越教育大学の先生方は常に勉強している。講義を受けているとそれが分かる。教わる立場の人間は、教える立場の人間が学び続けているかどうかを感じ取ることができるのだと思う。振り返ると、自分自身はどうだったのだろうか。忙しさを理由に、自信を研鑽する努力を怠っていたかもしれない。仕事をしている人間は、みな忙しいのだ。その中で学び続ける人間が、いい教師に近づくことができるのだと思う。

大学院生活はあと1年も残されていないが、中学校に戻ってからも学び続けることができるように、自分自身の課題をたくさん見つけようと思う。





## 研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授  
中村洋一(平成4年度修了生)

### 連載第1回

前号で、佐々木郁夫さんは「ただの人」になってペンを置くと宣言した。在学中に佐々木さんが発行していた『院生通信』からの大ファンなので、佐々木さんの引退宣言は寂しい。でも「普通の女の子に戻りたい」と叫んでマイクを置いたキャンディーズのランちゃんの例もあるので、いつか佐々木さんの名文がカムバックすることを期待したい。

私の研究室の北側の窓は、上越方面を向いていて、天気が良いれば、妙高のやまなみが見える。校長先生の眼で、様々なことを教えてくれた佐々木さんのようにはいかないけれど、研究室の窓からわが母校に向かって呼びかけるつもりで、あれこれ考えることを書かせていただこうと思う。『研究室の窓から』というタイトルは、本誌編集長の飯島さんが長年温め、考えておられたものを、お譲りいただきました。少しの間、お付き合いをよろしくお願いいたします。

### マラソンランナーのアタマの中

3時間59分15秒。2015年4月の長野マラソンで、念願のサブ・フォーを達成した。フィニッシュ・タイムの自己申告で割り振られたスタート地点は、アルファベット順のHというかなり後方のブロックだったので、スタートラインにたどり着くまでに5分以上かかった。後日送られてきた公式記録証で、ネットタイムは3時間54分10秒だと知った。サブ・フォーは、jogger と runner の cut score のようなもので、もし市民マラソンに CEFR のような指標があるとすれば、A2からB1になったというところか。

23才の時、「一生に一度くらいは」と思って、河口湖のフルマラソンを走った。3時間7分10秒だった、当時の世界記録にあと1時間まで迫った記録なので、よく覚えている。しかし、上越教育大学に在籍していた頃は、もうランニングから遠ざかって、腰回りにたっぷり脂肪を蓄積し始めたころだった。

25年ほどのブランクがあったが、今の職場の同僚に誘われて、4年前くらいからランニングを再開した。いくつかの小さなレースに出て、そこそこ走れるようになってきた2年前の6月、大ケガをしてドクターヘリで病院に搬送された。薪ストーブ用の木を切り出しに行き、山の斜面から滑り落ちた大木に跳ね飛ばされ、2メートル下の林道に背中からたたきつけられた。第5胸椎破裂骨折という勇ましい名前のケガだった。背開きで切開してもらい、15センチくらいのチタン製ラダーを脊椎に留めてもらった。筋金入りの男にはなったが、もう走れないかなぁ、と思った。しかし、退院した翌日、少し長い距離を歩いてみたら、もしかしたらゆっくりだったら走れそうかも、と思った。退院から3か月後、北陸新幹線の開通記念イベントとして飯山で開催されたハーフ・マラソンに、主治医には黙って出場したら、1時間47分51秒の自己ベストだった。

昨年4月、初マラソンから34年のブランクを経て、長野マラソンを走った。ケガのことや1週間前に生まれた初孫の寝顔なんかが頭をよぎり、スタートラインについた時には、涙が出てきた。生きていて良かったと思った。30キロまでは、自分でびっくりするくらい調子が良く、4時間を切れるペースだった。しかし、32キロ付近の坂を下っていた時、両足が完全にケイレンし、走れなくなった。制限時間の5時間以内を目指して歩き、4時間36分43秒でフィニッシュした。

今年は、密かに時間短縮を狙い、職場の体育館にあるランニング・マシーンを独り占めして練習に集中した。とりあえず、5キロを25分でカバーすることを目標にした。6キロで34分以内だったら7倍の42キロを3時間58分で走れる。7キロで40分だったら、ちょうど4時間だ。時速で言うと11キロを少し越えるぐらいだ。ランニング・マシーンを時速12キロ(1キロ5分)に設定して、どのくらい走れるかという練習を始めた。10キロぐらいまでは、それほど苦しくなく走れるようになった。本当は、もっと長い距離の練習が必要だけれど、年齢を考えると、あまり長い距離を走るのは賢いとは言えない。だましまし練習して、本格的に練習を始めた日からレース当日までには474キロ走っていた。

「4時間も走っている間、何考えているんですか?」と聞かれることがよくある。自分の場合、1キロ毎のラップをかけ算して、ペースを組み立てたり軌道修正したり、遅れ始めて諦めながら、できるだけ速いフィニッシュのために必要なラップタイムを、残りの距離数を自分の可能なペースで割って計算したりと、四則演算をしていることが多い。有酸素運動の最中に、簡単な暗算をするような「デュアルタスク」を行うと、認知症の予防にもなるそうだが…。その他は、あまり大したことは考えていない。走り始めてすぐは応援の方々がたくさんいて、その中に知っている顔がいなくて、きょろきょろしたりしている。3キロ走っても集団がばらけずに、なかなか自分のペースでは走れない。いらいらするが、ここで無理して追い抜くと、ジグザグ走りになり、去年のように後半、足に疲労が出てケイレンを起こす。4キロ付近で、路面の変化にシューズのソールが引っかかって、まさかの転倒をしてしまった。後ろのランナーはさっとよけてくれて大事には至らなかったが、将棋倒しになってもおかしくない状態だった。幸い痛みは強くなく、肘と膝から出血しているようだけれど、よく見えないので、大丈夫だと思うことにした。しかし、今日初めて履いたサポートタイツの膝の部分が破れているのだけは分かった。あちゃあ、高かったのにい…。

前を走るカラフルなユニフォームを見つけ、差を縮めていって「頑張りましょうね!」などと声をかけて、さわやかに、涼しい顔で追い抜いてやろう、なんて考える。7キロ付近で、白とピンクの帽子を見つけた。帽子の後ろでポニーテイルが揺れている。近づいていくと、見覚えがある

フォームで、ちょっと前の京都マラソンでサブ・フォーを達成したと連絡をくれた、初任の頃の教え子だった。去年は、35 キロ地点で追い抜かれてしまった背中だ。「おおい、やっと追いついたあ。これから中盤、頑張ろうなあ。」と声をかけて、ちょっと無理して追い抜く。

「伴走」のナンバーカードを見つけた。大阪からやってきて、視覚障がい者の部に出場している友人で、昨日は、久しぶりの再会に、我が家で乾杯した仲間だ。「Bブロックからスタートした人は、もう少し速く走って下さいよお!」と声をかけたら、「皆さん! この人、酔っ払いランナーですよ!」と大きな声で悪態が返ってきた。実は、二日酔いだけじゃなくて、血圧・尿酸値・花粉症の薬と、痛み止め・ケイレン防止の漢方薬なんかをいっぱい飲んでいたので、上位入賞してドーピング検査があれば、陽性間違いないのだ。確実に進行している老化に抗うことはできない。それにしても、スタートの時のロス・タイム5分をカバーするのに10キロもかかってしまった。右腕にはめているGPS付きの時計を見たら、10キロ地点で52分くらいだった。まあまあか。中間点に時計があって、1:57:30と掲示されていた。このままのペースで行けば、もしかしたら、4時間を切ることができる。

30キロ地点では2:46:28で、去年よりちょっと速い、しかも、ケイレンの予兆もない。しかし、別のトラブル発生で、36キロ過ぎに3:16:47と表示した後、時計の電池が切れてしまって、どのくらいのタイムで走っているかが分からなくなってしまった。だけど、あと6キロを43分以内で走れば、4時間を切る、1キロ7分のペースでいい。分かってはいるが、ペースはどんどん落ちていく。マラソンゲートの手前で、トラックの中から、アナウンスが途切れ途切れに聞こえてきた。「今、3時間\*\*分25秒です。」あと150メートルぐらいのはずだ。\*\*が59分だったら、あと35秒で150メートルはキビシイか。58分だったらもしかしたら「いける」と思った時、脚に力が戻って来た。イメージは、1983年福岡国際マラソンで、イカンガー選手を振り切って、ラスト100メートルを12秒で駆け抜けた瀬古選手だ。3時間59分、という表示が見えた。4時間切った、サブ・フォーだ!最後の100メートルは、多分30秒ぐらいで走れたのだろう。公式記録証を見ると、5キロ毎のラップタイムは、28:11、25:52、25:46、26:51、26:47、27:54、29:05、30:23で、最後の2.195キロは13:19だった。やはり30キロ以降のペースダウンが大きい。

イーブンペースで4時間を切るとすれば、1キロは、 $240 \text{分} \div 42.195 \text{キロ} \approx 5 \text{分} 41 \text{秒}$ で走り、5キロのラップは28分26秒になる。前半の20キロを、5キロ26分台で走れば2分×4=8分の貯金ができる。そうすれば、今回のように、30キロから、29分、30分と遅れて貯金から3分使ったとしても、まだ最後の2.195キロ用に、5分の貯金が残っている。

一般に成人男子の場合、身長×(0.65~0.7)がマラソンで走る時の歩幅だそうだ。フルマラソンでサブ・フォーをめざすならば、1分当りの歩数は168歩~160歩だそうだ。つまり1秒間で3歩弱進むことが必要だ。自分の場合だと、歩幅は $1.7 \times 0.65 \approx 1.1$ メートルで、フルマラソンだったら、 $42,195 \div 1.1 \approx 38,360$ 歩、走ることになる。4時間で走るとすれば、1分間に158.9歩、1秒間で2.66歩だ。実際には、38,360歩を234分で走ったので、1分間あたり163.9歩、1秒間に2.73歩、走ったことになる。1分間で5歩ばかり余計に走れたので、3時間54分と、6分ほど短く走れたのだ。計算すると、1秒間に0.08歩弱だ。1秒間に、もう0.08歩少なかったら、4時間は切れなかった。

目下の目標は、2020年東京オリンピックの予選会出場だ。まずはB標準記録の2時間30分を目標にしたい。何をバカな事を、と諦めてはいけない。あと1時間24分縮めればいいだけだ。1

秒間に 2.73 歩のペースから、1.27 歩増やして 4 歩進めば、1 分間に 240 歩進めることになり、42.195 キロの 38,360 歩を、159.8 分、つまり 2 時間 39 分台でカバーできることになる。「イチ・ニ・サン」というかけ声を、「イチ・ニ・サン・シ」にして、それを 1 秒間でできるようになればいいとすれば、まんざら夢物語でもあるまい。あと、4 年はある。とりあえず、1 秒間に 1 歩多く進むことを目標にしよう…。やっとかのサブ・フォー・ランナーのアタマの中は、「まあ、なんとかなる」と何の根拠もないけれど、楽観的ではある。

ゆっくり走る練習の時は、さみだれ的に、英語教育のことも考える。

小学校の英語教育はどうする？ 柳瀬・小泉 (2015, pp. 5 - 16) の言うように、英語のアクティビティがいつまでも「引用ゲーム」に留まっていたいいはずがない。英語で英語の授業をするにはどうすればいい？ グローバル人材の育成はどうする？ 複言語・複文化への対応は手つかずのままでもいいのか？ マラソン・ランナーの単純なアタマの中には、いい答えは出てこないが、英語教育研究の様々な課題について、「科学的」に研究していくことが、より重要な時を迎えていることは分かる。

「Can Do List の形での学習到達目標の設定」(望月他 編著 が詳しい) の具体的な作業も大きな課題のひとつである。CEFR が参考として言及されるのも頻繁に耳にする。しかし、残念ながら、建設的な方向はなかなか見えてこない。さらには、英語不要論の再燃など、英語教育をめぐる不毛な時計の振り子がまた動き出した状態も垣間見られ、無意味な議論の轍にはまってしまう可能性も懸念される。CEFR “3 Common Reference Levels” には、“a common framework scale should be *objectively determined* in that they are based on a theory of measurement” と言及がある (p. 21)。そのため、“a process which has been actively pursued since 1971” (‘Prefatory note’, p. ix) とあるように、30 年を越える研究を蓄積して scale を開発してきた、と言う。日本の Can Do List 設定の取り組みにおいても、この歳月の長さを肝に銘ずるべきである。ともすれば、「すぐに役立つ」「他力本願的な」Can Do List を欲する声も聞こえるが、日本の英語教育研究において、妥当で実現可能性の高い Can Do List を作成していくためには、腰を落ち着けて、長い時間的なスパンも視野に入れ、慎重な検討を蓄積していく必要がある。CEFR の Can Do の指標検討では、“Standard Setting Quantitative methods” として、主に “Item response theory (IRT) or ‘latent trait’ analysis” が使用された (‘Scale development methodologies, in Appendix A: developing proficiency descriptors’, pp. 207 - 212)。Standard setting (*Standards for educational psychological testing* が詳しい) における Mixture Rasch Model の研究 (Baghaei & Carstensen, Davier, Jiao et al, Templin & Jiao, Rost) も進んでおり、大変興味深い結果が発表されている。

新米サブ・フォーのマラソンランナーは、回転の鈍いアタマの中で、今、英語教育研究がやらなくてはならないこと、やれることは、まだまだたくさんある、などと考えている。

#### 参考文献

American Educational Research Association, American Psychological Association and National Council On Measurement in Education. (2014). *Standards for educational psychological testing*. American Educational Research Association.

- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. CUP.
- Baghaei, P. and Carstensen, C. H. (2013). 'Fitting the mixed Rasch model to a reading comprehension test: Identifying reader types' in *Practical Assessment, Research & Evaluation*, Vol. 18, No. 5.
- Davies, M. (1997). 'WINMIRA - program description and recent enhancement' in *Method of Psychological Research Online, 1997, Vol. 2, No. 2*. Pabst Science Publishers.
- Jiao, H., Lissitz, R.W., Macready, G., Wang, S., and Liang, S. (2011). 'Exploring levels of performance using the mixture Rasch model for standard setting' in *Psychological Test and Assessment Modeling*, Vol. 53, 2011 (4). (pp. 499 - 522).
- Templin J. & H. Jiao. (2012). 'Applying model-based approaches to identify performance categories'. in Cizek, G. J. (ed). (2012). *Setting performance standards, second edition*. (pp. 379 - 379).
- Rost, J. (1996). 'Logistic Mixture Models' in Linden, J. & R. K. Hambleton. (1996). *Handbook of modern item response theory*. Springer. (pp. 449 - 463)
- 望月昭彦・深澤真・印南洋・小泉利恵 編著. (2015). 『英語4技能評価の理論と実践 - CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』. 大修館.
- 柳瀬陽介・小泉清裕. (2015). 『小学校からの英語教育をどうするか』. 岩波書店.

## 編集後記

JAELEN 創刊以来、佐々木郁夫氏による「校長の眼 ～つぶやき・うたかた～」を連載してまいりましたが、佐々木氏のご退職に伴い、本号からは中村洋一氏による「研究室の窓から」がスタートしました。中村先生はテストの専門家として知られていますが、本号の記事のとおり多趣味で博学、大げがからの回復も含めて人生経験が大変豊かな方ですので、これからどのような展開になるのか、編集者として大変楽しみにしています。また、巻頭記事の執筆者であるウィーン大学留学中の酒井志延先生ですが、メールで投稿をお願いしたところ、8時間後には原稿と写真が添付されたご返信をいただきました。驚くべきスピードです。ご協力、厚く御礼申し上げます。なお、酒井先生には2011年に発行した JAELEN No.5 にも巻頭の原稿をお願いしており、こちらの題は「大事なことはすべて上越で学んだ」です。研究論文の書き方について大変わかりやすく解説されており英語教育専攻の院生必読の記事です。上越英語教育学会ホームページで閲覧可能ですのでぜひ、ご一読ください。

(編集委員 H.I.)

---

2015年7月14日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)

---